

昭和15年2月19日第3種郵便物認可  
毎月1回10日発行  
平成19年4月10日発行  
華道第69巻 第4号

華道家元  
池坊

# 華道

KADO  
IKENOBO

4

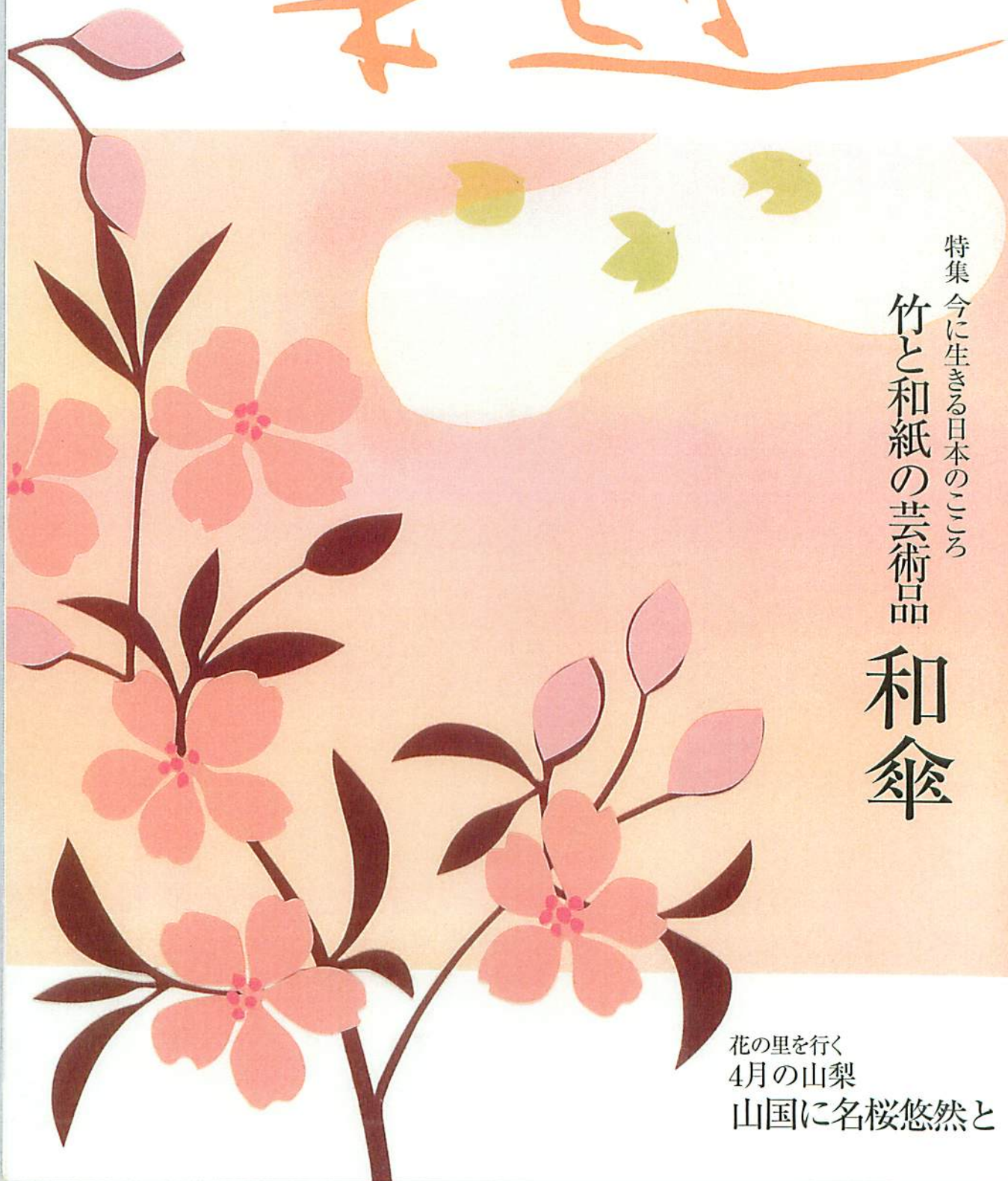
APRIL  
2007

特集 今に生きる日本のこころ

竹と和紙の芸術品

和傘

花の里を行く  
4月の山梨  
山国に名桜悠然と



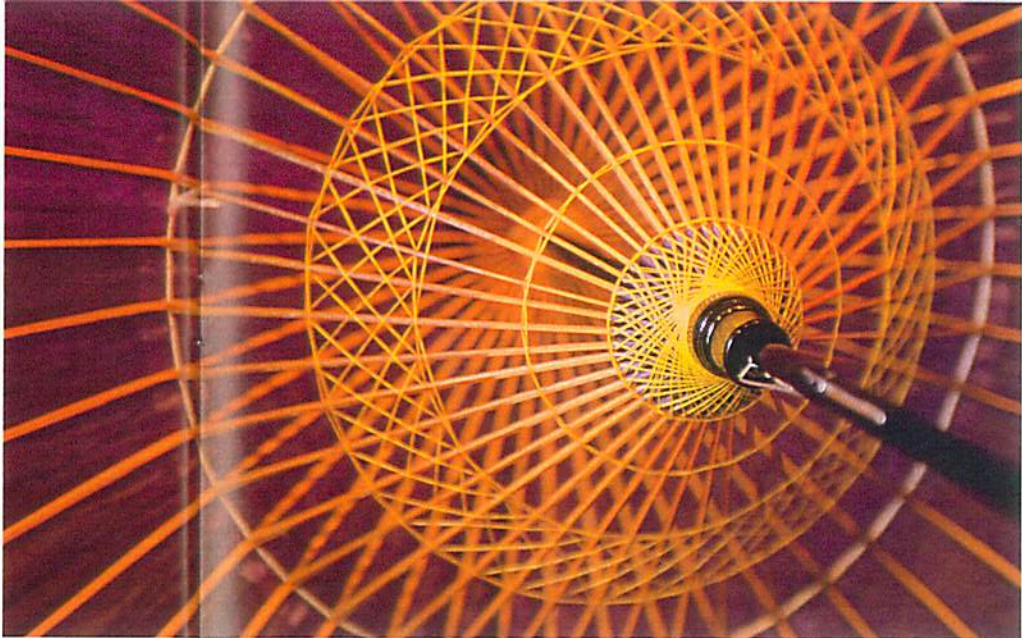
# 竹と和紙の芸術品 和傘

繊細な竹の骨組みと気品のある優雅な和紙……  
この見事な融合によってつくり出される和傘は、  
機能美とともに日本人の美意識を兼ね備えている。  
雨音もどこか優雅にしつとりと……。

**人** 形寺として知られる京都・宝鏡寺の境内には、  
天気の良い日にはほぼ毎日、色  
とりどりの和傘が花を咲かせて  
います。「これは天日干しとい  
う風景。防水のため油引きした  
ものを乾かしているんですよ」

と話すのは、京都で唯一の和傘  
製造元「日吉屋」の五代目西堀  
耕太郎さん。

江戸時代末期創業の日吉屋は、  
各種野点傘をはじめ、素材を生  
かした番傘、華やかな蛇の目傘  
など、古来から日本人の必需品  
として使われてきた和傘をつく  
り続けてきました。なかでも茶  
道表・裏両千家で使われる五尺  
(約1・5m)もの本式野点傘  
は、全国で唯一日吉屋のみで製



傘はもともと仏教とともに中国から伝えられたといわれているが、一般的に庶民に広く使われたのは江戸時代。浮世絵の美人画のアイテムにもしばしば登場する。

## 和風照明

和傘の素材、フォルムを生かしたシンプルな照明「古藪里-KOTORI」は、五代目が旅行建築を繰り返し、昨年来ようやく完成。和紙を透かしたやさしい光と竹骨の美しさが際立つ照明は、和室に限らず現代的な空間にもマッチする。和傘のように開閉できるので収納もコンパクト。



作されているもので、その趣ある色合い、美しいシルエットは茶道家元の追求する「わびさび」の世界をベースに完成させたものの。「京和傘」としても知られる逸品です。

和傘づくりの工程は、一本の竹を数十本に均等に割る骨づくりから始まります。それを一本一本絹糸で繋ぎ骨組みをし、そ

の上に数十枚もの手すき和紙を一枚一枚貼っていきます。乾燥後は形を整えながら折りたたみ、自然の竹のような円筒状に仕上げます。さらに亜麻仁油を引いて天日干しを行い、漆や顔料で

彩色し、飾り糸や藤巻などの化粧を施し完成。「おおまかに分けても約十工程。部品をつくることから教えれ

ば、百ほど工程があるのでは……。昔はすべて分業でしたから職人の手から手へ、数ヶ月かけて仕上げられていったのです。数ある竹製品のなかでも複雑さは群を抜いています」

そんなさまざまな工程を経て完成する和傘ですが、洋傘の普及、呉服需要の衰退にともない、需要がどんどん減っているのは周知の事実。日吉屋も当然、廃業の危機を迎えます。

「日吉屋はもともと妻の実家なんです。ここを継ごうと思った大きなきっかけは、エリザベス女王を歓迎する野点風景の写真でした。日吉屋がつくった野点傘の下でお茶を飲む女王の写真を見たとき、この店が潰れたら誰がこの傘をつくるのか……とこ



## 上) 野点傘

緑と白を交互に段張りした茶道家元御用達の5尺の本式野点傘。



## 中) オーダー傘

幾何学模様の糸綴りは華やかさを演出する。写真の傘は特注の蛇の目傘。紅葉やクローバーを散らした和紙は、お客様からの持ち込みだとか。日吉屋では色・サイズ・デザイン、家族・屋号・ロゴ入り、用途別など、各種のオーダー傘の注文も受けける。時代劇などの映画や、舞踊やオペラなどの舞台関係の和傘も多く手掛けてきた。

## 下) 紙團扇の傘

神社仏閣、各地の祭礼、伝統行事で使われる古い傘が持ち込まれることも多い。写真は、何年かぶりに修理に持ち込まれたという、紙團扇・長刀鉾で使われている切り絵入り傘。また、「母の形見なのですが……」「嫁入り道具で持ってきたんですけど……」などと大切な思い出が詰まった傘も全国から届く。



和傘  
竹と和紙の芸術品

それからは職人さんの横にびつたり寄り添い、和傘づくりを学ぶ生活に。「職人さんは何も教えてはくれませんが、作業の手法をビデオに撮ってそれを手本に傘を貼る……まさに技は

- 1 糊つけ+折り目つけ：手際よく刷毛で糊をつけ、さまざまな型紙に合わせて数回された手置き和紙を裏面に貼り上げていく。写真手前のすり鉢には、タビオカ粉を鍋に煮立ててつくった糊が。藤粉（わらびこ）を使っていた昔は、お腹がへった職人さんが糊を食べながら作業を続けていたとか。下の写真は折りたたみやすくするようにへらのようなもので折り目をつけている様子。
- 2 天日干し：お向かいの宝鏡寺に天日干しされた野点傘。和傘は骨に和紙を貼りつけ、防水のために油引きをしたあとに天日干しする必要がある。
- 3 仕上げ：和傘の骨の数は洋傘の数倍。仕上げ作業として美しい円筒形に傘を閉じられるよう、貼った紙を内側に畳み込む。閉じた傘の形はまるで一本の竹のようだ。



盗んで学びました」それと同時にホームページを作成するなど、インターネットを駆使して和傘の魅力を伝え、販売の範囲を大きく拡大。さらに照明デザイナーなど異業種との交流も深め、和傘職人としての技法も駆使した、新しい商品開発にも余念がありません。「伝統とは常に革新し続けることだ」と思います。一見、矛盾している言葉に聞こえるけれど、時代の変化にもなまって少しずつ新しい文化が生み出される。それが蓄積されたものが伝統だつたりするんですよ」

代々続く手技をただ受け継ぐのではなく、常に新しい創意工夫を加えて、和傘という伝統にアプローチをかける……それが次世代に続く「新しい」伝統だと考えます。

撮影 ● アトリエ傘（池田 薫）

番傘と蛇の目傘、どう違う？

和傘には番傘と蛇の目傘があります。番傘の名前の由来はいくつかありますが、番茶など日常使いのものには番という文字をつけることから来るのだとか。

また、蛇の目傘とは、白い輪が入ったデザインが上から見た時に、大蛇の目を思わせることからこの名がついたそう。現在は無地や各

種柄物の和傘も全て蛇の目傘と呼んでいます。また、番傘は丈夫な油紙を貼った骨太の雨傘で、素材のよさを生かしたシンプルなもの。それに対して蛇の目傘は、糸飾りなどが施されている細身で色鮮やかな傘です。一般的には番傘が男性、蛇の目傘は女性が行くことが多いとされています。



興千京、興千京の茶道家元のお膝元に店を構える。工房見学やミニ和傘づくりを体験することもできる。要予約。  
協力 ● 日吉屋  
京都市上京区寺之内通  
堀川東入百々町546  
TEL：075-441-6644  
http://www.wagasa.com

特集の花

花と和傘



季節ごとに移り変わる花暦は、四季の装い。用と美を兼ね備えた和傘は、風趣、雪月花にドラマとストーリーをみごとに演出。雅な詩情、情緒あふれる世界に誘ってくれます。

東 勝行  
Katsuyuki Higashi

生花新風体

花材：こしだ(主) 椿(用) れんぎょう(あしらい)

Style : Shoka shimpur-tai  
Materials : fern, camellia, Forsythia